

毎日の保育問題

三八

上 澤 謙 二

はしがき

毎日保育の實際に當つてあると、毎日問題にぶつか
る。然しそれを延期し、回避することはできぬ。研究室
での問題なら「いづれ研究してから」でその場は濟むが、
活きた實際の保育室ではそれは許されぬ。根本的な解決
は兎に角、一應の處置をせねばならぬ。それをノートし
たものがこれである。果してその處置が適してあるかど
うか。自ら物足らぬこともあり、不安なこともあり、悔
ゆることさへある。大方の示教を切に待つ所以である。
敢てこれをこゝに發表するのも、そのために外ならぬ。

一 国旗掲揚の綱が切れて 毎朝、国旗掲揚のボールの

まはりへ、先生と園児と並んで、国旗を掲げる。

或る朝のこも。旗を結んで掲げる綱がブツッリ切れて落
ちて、足下へ蛇のやうにトグロ巻いてしまつた。子供達は
ハツと驚く。困つた「こいふやうな表情が、先生達の顔に

浮かんだ。その時である。一人の先生が、元氣な大きな聲
でいつた。「このお庭の中にあるもので、きれが一番長
だらう。みんな見てごらん」

子供達はグル／＼見はした。

「一番長いものへ旗をゆはえつけて擧げようね」

この言葉で、見まはす子供達の心に、急に熱き興味が湧
いてきた。

「さあ、みんなさがしておいで」 みんなバラ／＼さかけ
出す。やがて三本の棒と竿を、一三人ついで持つてくる。

ほかの子供はワイ／＼あみからづいてくる。ちよつて見て、
きれが一番長いか、先生にはすぐ分かる。けれどもさうは
いはない。その代りにかういふ。

「よく持つてきたね、有難うよ。さあ、きれが一番長いか
くらべて見よう。持つてゐる者はちやんさまつすぐに立て
て。それからほかの者はその前へ並んで、よく見て」

この言葉の中には、働きを痛ふ意味もある。長いものを

二三人でまつすぐに立てる協力ミ工夫の訓練の意味もある。長短を測る観察指導の意味も籠つてゐる。

三本は七人の手によつてまつすぐに立つた。前に並ぶ大勢は、じつとそれを見つめる。

『あれが一番長い』と、数人が一度に指さしていふ『あれ』と、みんなそのあとにつく。その通りだ。

序でに先生はかういふことを忘れない。

『ちやあ、一番短いのはぎれ』

出来るだけ観察の結果を表現させて、その力を強める手だてである。

『それが一番短かい』と、大勢の答がある。これもその通りだ。

『ちやあ、これへ旗をつけよう』

分かりきつたことだが、先生は猶聞く、飽くまでも子供達の考へを働かすためである。

『その一番長い』

異口同音に、叫ぶやうにいふ。

この際、持つてきた三本に對して、いきなり先生が『これが一番長いから、これに旗をつけます。その二本はいいです』といつたらどうだらう。失望する子供もあらう。落膽する子供もあらう。折角探して持つてきた努力が、簡単な否定で酬いられては、さうなるのも無理はなからう。

けれども、かうすれば自然に滑かに、何の凝滞も曲折もなく事件が運ばれてゆく。子供達自身を働かせることは、かういふところにも功德がある。

『ちやあ、お當番がゆばえて』

ここに至つて、毎日のいつもの順序に還つたわけだ。二人のお當番は進み出て、衆人環視のうちに國旗を結びつける。いつもの綱が竹に變つただけである。やがて結びおへた。

『ちやあ、その竿を、ポールへゆはへつけようね、ほら、そこに落ちてゐる綱でね』

掲揚綱は臨時にしばらくつけ繩に早變りする。お當番の二人に大きな子供が三人程如はつて、先生がちよつと手を貸して、ポールへしつかり竹竿をくくりつけた。國旗はひらひらとひるがへつた。

思ひも寄らない事件の経過の、竹の先についた珍しい有様は、子供達に新しい興味を起させた。旗はいつもより遙かに低かつたけれども近かつたので、かへつて親しみを感じさせるやうに見えた。

みんな喜んで手をたたいた。さうしていつもの歌をうたひ出した。

『白地に赤く、日の丸染めて、ああうつくしや、日本の旗は』

二 引込思案な子供の机運び

長い机をかたづけろ。力を出せば、先生ひとりでかたづけられないことはない。けれども、子供達を働かせようとする。

「さあ、誰か、先生のお手傳ひして、いつしよにかたづけられますか」

お手傳すきの子供が三人、ひびきの物に應ずるやうに「かたづけます」「返事して、さび出してくる。引込思案のTちゃん、だまつてじつと見てゐる。

「さうだ、Tちゃんのこゝを働かせてやらう。よい機會だ」
さう思つた先生は聲をかける。

「Tちゃん、Tちゃんもお手傳してちやうだい、ね。みんなで持つてゆきませう」

すると、Tちゃんは身體をうねらせながらも立上がつてきた。さうしてほかの者と同じやうに机へ手をかけた。

「うまい、占めた！」
さう思つた先生は又聲をかけた。

「ひあ、持つてゆきませう。よつしよ、よつしよ、みんなよく運べるねえ」子供達はすぐその聲に應じた。

「よつしよ、よつしよ」
机は軽々運ばれてゆく。

けれどもTちゃんのかけた手は、机がうごき出すと、すぐ離れた。そのまま引きつられるやうについてゆく。時々チラツミ手が出て机を持つけれども、すぐ又離れる。否、

それは持つさいふよりは、そつさはるさいふ方がほんたうだ。机は次の部屋へ運び込まれた。先生はみんなに「御苦勞さま、有難うよ」さいふ。Tちゃんには殊に強くいふ。ほかの子供は、先生にいはれてニッコリするけれども、Tちゃんは寧ろぼんやりしてゐる。ほかの者よりも強くいはれたのだけれどもぼんやりしてゐる。

さうしたのだらうか。消極的な性質のためだらうか。先生はその時さう思つて、何の氣もなくそれで濟ましてしまふ。けれども、いかに消極的な子供でも、ほめられてお禮をいはれて、うれしく思はない者はない。ニッコリしないものはない。もしさういふ場合にさういふ反應を示さないとするならば、その子供は全くの白痴か、放心状態の病人かであらう。「ほめられるさいふこゝは、幼児に取つては日光のやうなものである。痴愚に見做される程の者でも、ほめられればニッコリする。この際Kちゃんがぼんやりしてゐるのは、消極的な性質のため」だけでは濟まされなくなる。

それならさうしたのだらうか？

一言でいへば、Tちゃんはほめられるわけ、お禮をいはれるわけが分らなかつたのである。Tちゃんは實際はその机を運ばなかつたのである。その手はおつ／＼机にさはつただけではないか、しかも引込ませる方が多かつたのではないか、さうして寧ろやむを得ずついて行つたのではないか。謂はばうろ／＼、我にもあらずうろ／＼して行つ

たに過ぎないのではないか。

運ぶまは、手傳ぶまは、自分の力を出すまこである。そこに満足があるのである。その力を出したまこが役に立つた。人のためになつた。それでいよく満足があるのである。それを尊敬する先生から認められ、ほめられお禮をいはれた。それで益々満足が加はつてニッコリするのである。

まこころが、Tちゃんはお友達の中にあつて、同じやうに行動しながら、力も出さないし、少しも役に立たなかつたのである、幼児だからまだ恥かしいまこ感じはなからうが、何まもなく物足りない詰らない感じは禁じ得なかつたらう。或はまこかしいやうな感じもしたまこも知れぬ。そこへいきなりほめられお禮をいはれたのだから、そのわけが分らなかつたのも當然であらう。だから、いかにも唐突なまこではない氣持で、ぼんやりしたのも當然であらう。

この先生が消極的な子供を特に注意したのはよい。さうして機會を捉へたのはよい、獎勵を與へたのもよい、特に強くお禮をいつたのもよい。すべてよい。

けれども肝腎なまこころでその一つを缺いた。それは引込思案なまこの子供に、實際に即した具體的な指示をしなかつたまこである。獎勵は言葉の掛聲に止まつて、行動の上にならば及ばなかつたまこである。

『Tちゃん、その角のまこころを持つてね。兩方のお手々でしつかり持つて』

ここのまこ具体的な行動にまで徹する指示が必要だつたのである。

『まこころ、よく持つたね。力を入れて、一生懸命持つてゆきませう、さうく』

よく持つか、力を出したか？ それをたしかめつつ獎勵する——それだけの注意が、更に必要だつたのである。

引込思案な子供は、呼ばれて出てくるまこだけが大幅な奮發なのだ。さてまこを持つかまこ自分で決定して、自ら力をふり起してそれに従事するまこは、到底思ひも寄らぬまこである。だから、この子供にほんたうに物を運ばせるには、呼び出しただけでは足りない、言葉で獎勵しただけでは足りない。實際に持たせて力を出させるまこころまで、はつきりまこしつかりまこ指導しなければならぬ。さうしなければ、運んだまこにならないで、ただよやくまこくつついて行つたまこになつてしまふのである。

かくて折角企てられた適當な意味深いまこも、ただその一つを缺いたために、その子供に更にチグハグな感じを與へ、物足りない經驗を齎らす逆な結果になつてしまつたのである。

恐らくこの子供は、又いつかよい機會がめぐつてくるまでは、呼ばれても出ないであらう。

まこに保育ま申すものは『重箱の隅を針でつつく』以上の細心な注意がいるものなのである。